

7 劍は凍てり、銃は燃ゆ

劍は凍てり、  
銃は燃ゆ

葉山讓二

——プロツサムヒル、ナヴィア平原。

リリイウッドとの国境になるここには商業都市もあり、物流の主要道路となる街道も走っている。隊商に限らず人の往来の多い街道沿いのこは、花騎士達の定期的な警邏もされている。

しかしながら、常に休みなく警備がいるわけではない。確かに彼女達はこの世界に於ける脅威である害虫と戦う為に、体力、精神力は常人のそれをはるかに凌駕している。異形なる暴力を制する為には、それが必要となるのだ。

だが、彼女達は機械ではない。不眠不休で稼働し続けることは、土台無理な話である。悲しきかな、事が起こるのは大概そんな継ぎ目の時なのである。交易の為に街道を渡っていた商人達から、花騎士に調査の要請が出された。

その街道からやや離れた所で、死体が発見されたのだ。

付近に害虫もいなく、近隣の集落が襲われたという話も聞かない。しかし、その死体は一見してナニカの手によって殺されたのは一目瞭然であり、もしや害虫が絡んでいるのであれば、一般人の手には到底負える問題ではないのである。

「ふむ……」

熱を無くし、白く冷め切った体の傍で膝をつき、女性氣息を漏らす。

足元までであろうかという波掛かった薄紅の髪が、その単純な動作でふわりと空気に舞った。斃れる身体を監視するように見回すその瞳は閉じられている。

「どう？ やっぱり害虫の仕業？」

その背後にも花騎士の姿。何の気配もない開けた平野で、一応周囲の警戒をし、調査に集中できるとしている。

「確かに広意義では害虫の仕業だが……」

歯切れの悪い言い方に、周囲に視線を配っていた少女が、遺体の傍らに座る花騎士へと注がれる。

「アブラナちゃん、これを見てみるといい」

背中での視線を感じたのか、伏せられた瞳がアブラナと呼ばれた少女へと向けられる。

納得のいかない、不服そうな顔で地面に倒れる身体を観察する。

花騎士として、彼女達は普通より死に近い場所に立っている。だからといって死体を見ることに何も感じないかといえ、勿論そんな事は無い。命を失ったヒトを見るのは、当然ながら辛いのだ。

実に、酷い状態だった。

身体のあちこちに穴が開いている。鋭い何かで何度も何度も刺された痕跡が容易に見て取れた。

だが、乱雑に刺されたその中で急所に入っているものはない。わざとはずしたというのなら看過できないが、急所を知らないでとにかく刺し続けたという方が正しい状態である。

「左の脇腹の刺し傷、ここが一番深い傷だ。傷跡から見ると十センチから十五センチくらいの刃物だな」

「ちようど、ペティナイフくらいね……」

どこの家庭でもある一般的に使われる調理用のナイフである。

調理用であれ、ナイフはナイフ。人に向けられれば殺傷能力を持つ武器となり得る。

だが、それでは……。

「これは、人の仕事だつて言いたいのか？」

この人物を殺したのは、同じ人間がだという事になってしまふ。

「カマキリ型の害虫がいるが、あれの鎌はここまで小さくない。新型だと言われればそれまでだが」

それを差し引いても、これは人の手に寄るものだと、静かな装いが語る。ならば一体何を決め手としているのか、アブラナが視線で問うと、落ち着いた口調で彼女は答えた。

「害虫は、こんなに無駄な殺し方をしない」

アブラナが滅多刺しになった死体を見る。最大限に、これ以上にならないに負傷させたこれの何処が無駄なのか考える。

「確かに害虫は人を殺すが、殺すだけだ。殺す為に攻撃する。それ以上の事はしない。しかしこれは、どうみても殺すのが目的じゃない。殺す為に刺したのではなく、刺していたら死んでしまったと言った方が正しい。おそらくは、死んでからも攻撃を続けているだろう」

冷静に、的確に分析された状況に、アブラナがつまらなさそうに目を細める。

「さすが、王国最強のウメ様は洞察力も優れているのね」

「買い被りだよ。君だってそのくらいわかっていたんだろう？ 事実を認めたくなかつたか、認めたか、それだけの違いだよ」

棘のある言い回しに、ウメと呼ばれた女性は口元を緩めて、極めて穏やかに答える。

「ヒトがヒトを殺すことを善しとしないその優しさは、アブラナちゃん  
の長所だ。悔いることも、恥じることもない」

そんな言い方をされるほうが余程恥ずかしいと、不機嫌そうに、けれどどこか照れた様に頬を染めて視線を逸らす。

それにそれこそ買い被りだった。ウメの言うとおり、アブラナもある程度の予想はしていたが、彼女程状況を理解していたわけではない。なんとなく、今回もそうなんじゃないかと、そういう漠然とした予想だけしかなかったのだ。

そう、今回もである。

「じゃあやっぱりこの事件は……」

こくりと、ウメが頷く。目の前にある死体、この事件の概要を理解して、その表情が僅かに曇った。

「十中八九、感染者だろう」

スプリングガーデンに於いて長く続く害虫とヒトの戦い。最初こそ害虫の一方的な殺戮だったものの、ヒト側は花騎士という戦う術を身につけ、この脅威に対抗する様になった。

千年来続くこの戦い。害虫も増殖していくが花騎士も増加している。新たな花騎士が生まれて行き、この勢力は拮抗している様にみえた。

だが、そのバランスを崩す一手が、最近になって散見されるようになった。

それが感染である。

この地にいる害虫は元々人類に仇す物ではない。花の蜜を運び、受粉させ、花を繁殖させる事や、作物を枯らす虫を食べて実りに結ばせる虫等もいる。

繁殖機能を持たない害虫が、体内の毒をこの虫に感染させることで、害虫となり、常に増殖を続けている。



もしもその感染が、ヒトにも及ぶとしたら。

千年間類を見なかったそのもしもが今起きているのだ。

どういう経緯で、どんな作用で、何が原因となっただけはわかっていないが、確かに人間の害化が見られているのだ。

ナヴィア平原で今回発見された死体も、その毒にあてられた人間の所業であると推察し、調査でわかった事を報告する。

大きな事務用の机は、一見簡素でありながら手の込んだ装飾がなされておられ、けれどそれは豪華さよりも機能性を重視されたデザインとなっている。その上には書類が詰まされており、席につくのは一人の男性。

花騎士達を纏める騎士団の団長である。

ウメとアブラナが調査してきた報告を一通り受けると、団長はふう、と溜息を吐く。

「すまない団長さん。私は力及ばずだったか」

自分の報告内容が、彼の期待するものではなかったのかと頭を下げると、団長はそうじゃないと首を振る。

「ウメはよくやってくれているよ。本当に、君がいて助かっている。ただ、また感染者かつてね」

机に詰められた書類から何枚かを拾い上げて、そこに書かれている文を確認する。

「今月に入ってからもう五件だ。少し多過ぎる」

はて、とウメが首を傾げる。確かに感染者による被害は増えてきている。だが、害虫の増殖と同じように毒にあてられるヒトも増殖するのではないかと予想すれば、多過ぎると言うには些か早計のような気がする。

返答がない事が、肯定の意見でないと判断したか、団長は手にしている資料をウメに見せる。

「感染者による被害が初めて確認されたのが、半年前だ。この時は月で一件だけ。翌月はなし。三ヶ月目は一件。四ヶ月目が二件で先月が四件」  
そして今月は五件目。順当に増えているようにも見えるがそうではない。彼が多過ぎるといった事に合点がいった。

「騎士団で保護した感染者は四人だったな。確かに、こちらで減らしているにも関わらず件数は尚も増えている。今月だって今は五件だが、放っておけば……」

更に被害が増えていくのは目に見えている。

一人が一件ずつ事を起こしているわけではない筈だ。今はまだ潜伏している感染者がいてもおかしくない。

とすれば、多過ぎる。感染者が増えていく数が多過ぎるのだ。このままでは、スプリングガーデンに住む人達すべてがその毒牙にやられてしまってもおかしくない。

「早急な手立てが必要だな、団長さん」

そういうことだ、と頭を手で押さえながら頷く。手立てが必要なのは十分に理解しているが、どんな手を打つべきなのか不透明なままなのである。彼らが感染した大本がどこなのかもまだ分かっていないのだ。

「解毒剤の方はどうなのだ？」

そしてもう一つの手立てが、感染者を治療する薬の開発である。